

世界都市に占める日本都市の特質と問題点

藤岡謙二郎

一 日本都市の比較的研究

日本をもふくむ世界の都市を概観すると、都市もまた何らかの目標に向って日々進化している様子が明かである。しかもその進化の速度は現在の場合資本主義化や社会主義化作用の大小に応じて異っている。都市化、すなわち Urbanization という言葉はしばしば近代化 Modernization という言葉と同義語のようにさえ使用されるが、これらはいいかえれば、資本主義化や社会主義化作用の遅速を意味した言葉だと考えてよいのである。

ところでこの都市化作用の大小は地域により国によって異なることは事実である。都市における地域格差は具体的には人口の集中となつてあらわれるが、かりに世界における百万都市の分布をみると、それは必ずしも地球上にまんべんなく散布してはいないのである。その大部分が北半球の中緯度温帯地域に偏在していることがわかる。その原因はとなると、それぞれの都市が立地する地理的条件や歴史的発達過程が大きく作用している。ギリシアの都市工学家のドキシアデイス (C. A. Doxiadis) が考えるように、やがて世界は全部都市化せられて、彼のいうエキュメネポリス (Ecumene polis) が出現するものとも考えられない。何故かならば地表の全面積の一七%を占める乾燥不毛の砂漠地はもちろん、極北のツンドラ地域にまで将来大都市が成立するとは考えられないからである。

こうなればある程度の地域による格差の生じることはそれが資本主義社会の都市であろうが社会主義社会のそれであろうが是認されねばならない。問題は過度な人口の都市集中に伴う弊害の除去であり、資本の偏在に伴う都市の進化速度の開きを少くすることにある。

それはともかく、東京都の現在人口はついに一千万に達し世界第一位の都市となった。日本の近代化の問題が漸く自他ともに世界の問題にな

りつつあることは事実である。昨一九六六年における第十一回の太平洋学術会議が東京で開かれた折にも、地理学の部門においてはこの問題が取りあげられた。^③しかし日本の東京はアメリカ的なメガロポリスであるニューヨークと同じだろうか。

東京の将来計画はニューヨークのそれと同じであつてよいかとなると必らずしもイエスとは答えられないものがある。日本の都市には日本都市としての風土的歴史的特質があり、それを基礎にして将来の都市づくりも考えられなければならない。そこに居住する市民の性格が異なるように、世界の都市それぞれに特徴がある。すなわち世界都市の一員としての共通性を具えながらも、それぞれの地域性に応じた各自の特徴をもっている。ところがこのような静的な日本都市の基本的特徴については戦前に日本の都市及び村落を紹介したアメリカの地理学者ホール(R. Hall)の論文^④以外にはあまりにみられない。ミシガン大学の教授でありながら、日本のアジア財団の研究所の設立者でもあった彼は、日本での滞在期間が長く、集落地理学者として奈良盆地の歴史の村落である環濠集落を紹介するとともに、日本の都市分布や、その副題のごとき歴史的伝統ある都市を紹介した業績は大きい。“Castle Towns (Joka-Machi)”とか“Tchibamachi”“Monzenmachi”等の名称が外国に紹介されたのも彼に負うている。而してこのような発生系譜を主にした都市の歴史的分類はふるくわが小川琢治によってなされたものである。^⑤

すでに本世紀のはじめドイツの地理学者のオーベルフネル(E. Oberhumer)は世界の都市を二大別し、これを大きくヨーロッパ型都市とアメリカ型都市とに大別し、^⑥ヨーロッパの場合についてはスコットランドの都市計画家ゲデス(P. Geddes)が、ヨーロッパ各国の都市の特徴をひろい観点から観概している。^⑦同様にイギリスの地理学者フリユール(H. J. Fleure)もまたイギリスといわず温帯ヨーロッパの都市分布を、南仏、パリ盆地等各地域毎にいくつかの型に分類しているが、^⑧ヨーロッパ人による日本都市との比較研究は、もとより、その紹介すら今日に至るもなお歴史的都市を研究したイギリスのディッキンソン(R. Dickinson)の書物にも、^⑨また世界の大都市誌を書いたロブソン(W. A. Robson)の書物^⑩にもなされてはいない。ところが一九五七年度に日本で開催された万国地理学会議(IGU Regional Conference)は日本学者による戦前戦後の日本都市の研究をひろく海外の地理学者に知らせるに役立った。かくて近年出版をみたアメリカのハウザー(P. M. Hauser)等の都市近代化の書物の中にも比較都市誌研究の方向がみられてきた。その第二章の“Comparative Urban Research”の中でギンスバーク(N. S. Ginsburg)が“Urban Geography and ‘Non-Western Areas’”と題して西亜や東亜の都市を取扱つ、東亜のふちでも日本の都市は近代化が早く、インドその他の都市と同一に取扱われるべきものでないことが述べられている。^⑪

日本の学者による日本都市の比較研究は、その後米倉二郎によって中国都市との対比がなされ、木内信蔵また世界の都市分布を四大気候帯にわけ、温帯都市として地中海周域と華北以下を六区分し、その中に日本を入れ、建築様式その他都市景観の気候的特徴を述べたことがある。戦後の日本の都市研究ではむしろ、かかる静的な比較研究そのものよりも都市の近代化の問題に焦点がしばられている感があり、上掲太平洋会議においても正井泰夫によってかかる問題が発表せられた。筆者はいまこれら近代化の問題をもふくめ、さらに戦後に盛んになった都市計画や都市社会学的な問題をもふくめて改めて日本都市のもつ性格的特性を以下にのべる三項目から、主として世界都市との比較において考え、その中から浮かぶ問題点を検討することによって明日の日本の都市研究に具える基礎的な資料にしたい。

一一 自然的環境からみた場合

まず経緯度的位置と気候的環境からみてみよう。日本の位置は北海道宗谷岬の北緯四五度三一分から南の与論島の二七度線までであるから緯度差一八度三一分に及び北と南の都市とではずいぶん気候的に変化がある。にもかかわらずこれを世界全体からみると、北半球における中緯度温帯における大都市集中地帯よりもいくぶん赤道よりに分布することになる。ところがこれを気温について比較すると同緯度のヨーロッパや合衆国の都市よりも低く、且つ年較差の大きい点ではむしろ内陸アジアの都市型に近いといった方がよい。

第一表はほぼ北緯三八度線上にある世界の代表都市四つを選んだものである。うち新潟とサンフランシスコはいずれも太平洋及び日本海岸都市として相似た地形的位置を保つにもかかわらず、シスコは西岸気候、新潟はアジア大陸の東岸気候型を示すために、気温の年較差の開きが極めて大きいことが知られよう。また年間雨量についても新潟が四都市の中で最も多いのは冬のモンスーンによる積雪を示している。これらに対して中国の太原はシャンシー省の内陸盆地にあり、代表的な大陸型であることはいままでもない。一方内海の地中海にのぞむアテネは夏に雨がすくなく、冬温暖なCs型を示めし、年平均気温また最高で最も暮しやすい。

日本の気候型はケッペンのCf型であるが、サンフランシスコのような夏期に冷涼な西岸海洋性型Cfbに対して、夏に高温な大陸東岸型ないははモンスーン型、すなわちCfaとして区別される。従って日本は島国だというけれども、アジア大陸東辺の付属島嶼にすぎない。とはいえ島国であるが故に日本はまた夏のモンスーンや台風によって夏期にはしばしば都市災害を蒙る。“Typhoon killed many peoples”等の記

世界都市に占める日本都市の特質と問題点

第 1 表

都市名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年平均	年較差
新潟	1.7	1.8	4.8	10.2	15.3	19.9	24.1	25.8	21.4	15.5	9.8	4.7	12.9°C	21.1°C
	104	126	121	104	95	127	193	107	177	165	171	264	1841mm	
大原	-7.5	-2.8	3.6	11.4	18.3	22.5	25.3	22.8	17.5	10.6	2.2	-4.2	10.0°C	32.8°C
	3	3	3	10	28	56	117	112	43	13	0	0	386mm	
アテネ	9.3	9.9	11.3	15.3	20.0	24.6	27.6	27.5	23.5	19.0	14.7	11.0	17.8°C	16.3°C
	62	36	38	23	23	14	6	7	15	51	56	71	402mm	
サンフランシスコ	9.2	10.5	11.8	13.2	14.6	16.2	17.1	17.1	17.7	15.8	12.7	10.1	13.8°C	8.5°C
	102	88	68	33	12	3	0	1	5	19	40	104	475mm	

世界都市に占める日本都市の特質と問題点

事が出るとハリケーンを知っているアメリカ人は別として、イギリス人には理解しにくいようである。なぜならば、この国においては偏西風によるしとすと降る小雨程度しか考えられないからである。北緯五五度五〇分の位置にあるグラスゴウの年平均気温は八・〇度で、日本の北海道の寿都の八・一度に近い。ところがグラスゴウの年較差は一〇・一度、寿都は二四・六度である。しかも寿都は北緯四二度四五分であってグラスゴウよりも緯度にして一三度も南よりなのである。ここにも同じ島国であるイギリスと日本の都市環境が異なる。また雪の多い日本では新潟県の高田市のごとき今もなお市街地にアーケードならぬ雁木といった防雪設備がみられる。

梅雨期における集中豪雨や台風による高潮は日本の場合、毎年どこかでおきる災害であり、これもまたヨーロッパの都市にはみられない。集中豪雨にせよ台風にせよしばしば阪神地域がその被害地になる。昭和九年の室戸台風時における芦屋市や神戸市域の被害が大きかったのは、背後に迫る六甲山地がばいらんし易い花崗岩から成りたっているがためであり、昭和四二年七月にあつても崖崩れの土砂が神戸市内のあちこちの暗渠に流れ込み、その上にたてられた商店や貸ビルが倒れ、天災か人災かの問題としてさわがれた。一方大阪湾は台風毎の進路を形成しており、大阪及び尼崎港における防潮堤のもつ意義はまことに大きい。一九五九年九月の伊勢湾台風はたまたま進路を俄かに転じて北勢から伊勢湾に向つたが、これによって名古屋が蒙つた被害のばく大であったことは、いまなお我々の耳目に新しいことはいうまでもない。現在では鍋田川干拓地はもとより、名四国道に沿つて新式の防潮堤が完成した。

防潮堤の建設に當つての教訓は、既往の統計によつて、その高度を決める従来の歴史的統計的方法では駄目なことである。つぎにチリ地震による津波によつて八戸市以下三陸沖海岸の諸都市が被害を蒙つたこともまた、狭小なリアス式海岸といつた東北地方の太平洋沿岸の地形に負うてい

る。しかし地震による都市災害は、ひとり日本特有の現象ではなく世界の地震国全般に共通した現象ではある。

つぎには地形的環境についてみよう。耕地面積がわずかに全国土の一四％にすぎない日本は山国である。中央部には高度二〇〇〇メートル以上に及ぶ日本アルプスが三条に雁行状をなして南北に貫いてその屋根を形成する。フォッサマグナを境として、北にリヒトフォーヘンのいう北彎山系、南に南彎山系が形成されるが、火山、山脈はいずれも花綵列島の日本弧に併行している。その間に横わる山間盆地は地質時代の終末期に形成された断層盆地である。各断層崖をきざむ河川は谷口に扇状地を形成し、やがて盆地床を埋積して行く。日本の地形はよく箱庭的だといわれる。狭小なあちこちの山間盆地は封建時代に地方分権制を可能にした城下町の建設を容易にした。日本の現代の都市問題を考える上でこの種山間における旧城下町に起源をもつ都市の開発を無視しえない。これが平野や低い丘陵のびる合衆国の都市とは異なる点であり、日本の場合、大都市以外に地方の小都市や町の存在意義が大きい。さらにこれを都市産業面についていっても地方の旧城下町時代からの伝統産業や地場産業振興の問題が考えられねばならないのである。

高峻な山地に源を發する日本の河川は急峻であり、平野の發達をまたずして海に注ぐ場合が多いが、太平洋岸においては必ずしもそうではない。とりわけ、関東平野をはじめとするいわゆる四大工業地帯には肥沃な沖積平野や低平な洪積丘陵を發達せしめた。東海メガロポリスや太平洋ベルト地帯等といった名称が近年使用されるが、コンナベーション (conurbation) — (家屋連担) — 作用が可能なのはこの種海岸平野の發達に負うている。これに対して北陸海岸や山陰海岸では親不知その他でみるように山脚が海に迫る箇所が多く、このようなコンナベーションコリダー (Conurbations Corridor) の形成は将来ともにのぞむべくもないのである。このような各種の地形をそなえた日本の都市はまた広大にして単調な地形変化しかもたないアメリカの都市とはその地形的環境を異にしているといってもよいのである。

つぎに高度別都市分布をみると、熱帯に属さない日本の都市は飛驒の高山市や信濃の諏訪市にみるごとく、せいぜい数百メートルどまりであつて、二、〇〇〇メートル以上の高度に位置するメキシコ市や三、〇〇〇メートル以上に及ぶ南米アンデス山地の諸都市、さらにはインド、インドシナ、エチオピア等熱帯の都市等とは異っている。地下の鉱物資源故に發達したいわゆる鉱山都市についても日本の場合各地に分散存在はするが、これを世界的にみるとその規模はいずれも小である。これは北海道や北九州の炭坑都市其他各地における若干を除くと地下の豊富な鉱物資源にめぐまれてはいないがためである。しかも日本には原油採掘の油田都市等は全くみられない。また大陸でなく島国である日本では海

岸砂丘は発達していても砂漠はなく、この点で西アジアや北アにおける砂漠のオアシス都市 (Oasis Town) といったものも存在しないのは当然である。

同様に世界の大都市は肥沃な沖積平野に発達する場合が多いが、この場合すべてが低平な三角州上に発達するとは限らない。従って基盤をなす地層も異なる。古生層のかたい岩塊から成るマンハッタン島のニューヨークに高層建築が楯比するのと、淀川三角州地帯に発達した大阪やインダスデルタ上のカルカタやクリク地帯の上海等とを同一視して考えることは出来ない。大阪ではまた戦前から工場用水としての強度の地下水の汲上げによる地盤沈下が問題になっている。昭和三五年から日本では建設省計画課から府県別に都市の地盤調査が行われその科学的報告書も出されていることは喜ばしいことである。じっさい個々の都市の地形的立地は市街地の発展を考える上に極めて重要であり、今日ではもはや内陸盆地の都市、臨海地の都市等といった分類だけではおさまらない。ふるくグリフィステイラー (G. Taylor) がアフリカの海港を陸繋砂嘴や溺れ谷都市、岩石丘陵上の都市等と区別したように、具体的な都市の地形的立地の研究が大切である。ことに日本の場合、臨海の地盤は耐震度が弱く、しかも地震国であるため、関東大震災や新潟地震にみたような災害は何時も予想されなければならない状況にある。

火災がまた風の方向や都市気候の特質によることはいうまでもなく、日本の場合春先きのフェーンや夏冬方向を異にするモンスーンの風上に工場を設置することは好ましくない。ヨーロッパでも工場は偏西風の風下にということがしばしばいわれる。夏冷涼の西岸性気候を代表する霧の都ロンドンのスモッグは冬に多く、日本の大気汚染ともまた異なる。これらの都市気候については福井英一郎の研究があるが、いずれにせよ世界都市の自然環境的比較研究が大切な仕事となる。

三 歴史的系譜と都市形態からみた場合

日本の都市を分類する場合、小川琢治以来しばしば城下町とか宿場町、港町等の歴史的系譜による分類が併用せられている。筆者もまた歴史時代以来現在にもなお継承されている都市を歴史的都市と呼び、明治以後新設の非歴史的都市から区別してきた。日本の場合、一九六七年現在の五六五市を一々系譜的に吟味してみると、その約半が歴史的都市にあたる。ということは大なり小なり、現在及び未来の日本都市の発展を考へる場合によきにせよ悪しきにせよ、このふるい歴史的遺制を無視出来ないということである。じっさい基本をなすものは王城の地平安京を模

做した直行状街路であるとはいいながらも遠見遮断の道巾の狭い道路、T字型の曲屈街路等が現在大型バスの通行の障碍となっているほか、ポ
ーフラの湧く旧城下町時代の湮は、それを史跡公園として保存さす以外には埋立てらるべき運命にたっている。

これに対して例えばアメリカ学者の都市分類は機能を主にしている。ふるく使用されたハリス(C. D. Harris)の分類の場合。(1)工業都市、
(2)小売都市(Retail Centers)。(3)混合都市(Diversified Cities)。(4)卸売都市(Wholesale Cities)。(5)交通都市、(6)鉱業都市、(7)大学都市、
(8)厚生保養都市(Resort and Retirement Towns)とされる。⁸⁾ むしろイギリスのオールソウ(M. Arousseau)は交通商業的機能を、物質の
蒐集、移動、分配の三つの面に分け、Aに相当するものを鉱業都市、漁業都市、林業都市、貯蔵都市、Bを市場町、瀑線都市、港湾積荷都市等
に、さらにCを物資輸出都市、同輸入都市、同供給都市等に区分し、これらをすべて貨物集散都市(Entrepôt Cities)と呼んでいる等である。⁹⁾

このほか工業の種類によって重工業都市とか軽工業都市、さらには消費財部門都市等々の分類が便宜的に使用される。かりに上掲ハリスの分類
を日本都市にあてはめた場合にもさほどの無理はなく、一先ずは通用される。しかし卸売都市といふ小売都市というも、日本の場合は歴史時代
からのそれを継承発展せしめている場合が多いのであり、またヨーロッパ、日本等の歴史的都市に多い門前町や宗教都市等の分類項目は歴史の
新しいここアメリカでは不必要なのである。このほか、非歴史的都市であってもニュータウンといった分類はみられない。これまたロンドン
等ふるい歴史的百万都市にみる戦後の傾向だからである。¹⁰⁾

これらから明かなように日本の都市の大部分がアメリカ其他新大陸の都市とは異ったいわゆる歴史的都市が多く、これらが産業革命の発達し
た明治以後徐々に近代化していったものであることが考えられる。このことに関してはヨーロッパも同じである。ドイツの地理学者ガイスター
(W. Geisler)が *Burgstädte* と *Kirchenstädte* というも、すべてが結晶化された歴史的核を有することを述べる。¹¹⁾

同様に都市の同心円的圈構造を考えたアメリカの都市社会学者たるバージェス(E. W. Burgess)の学説はあまりにも知られているが、例を
シカゴその他に求めた彼は中心域のC、B、D地区に中心的な核を考へてはいない。それはこの種新興都市においては市役所以外には共通した
核がないからである。従ってこの国の都市構造説にあつては工場その他多核の併用説(theory of multiple nuclei)もまた意義があると考へら
れているのは当然である。これに対して同じような都市の圈構造を考へながらもすでにのべたイギリスの都市地理学者であるディッキンソン
(R. Dickinson)は西欧の都市誌を述べたその書物の中でやはり歴史的核をたえず問題にしているのは注目すべきである。因みにこの歴史的核

とはケルン市の場合、ライン川の左岸にかつて紀元前に設立されたローマタウンの旧城壁内部のフォーラムのあった地区が今もなお商業地区として継承されているがごときである。日本の場合、旧城下町にあっては城地や士族屋敷は明治後役所その他の官街地区となり、現在もなおこれを継承している場合の多いことは各地の城下町出身の歴史的都市についてみれば明かである。

日本の歴史的都市の大部分は陣屋町をもふくむ旧城下町起源のものが多く、中には律令時代の都市が現在にまでその形骸や歴史的核をとどめているものも少なくない。千年の古都であった京都をはじめ、興福寺や春日神社の門前町であった奈良市街また平城京東辺の一部であったことはいうまでもない。さらに律令時代における各国の首都であった国府域を現在の市街地に踏襲しているものとしては越前の武生市、駿河の静岡市、播磨の姫路市、対馬の厳原市その他があげられる。

従ってこれらの市街地には律令的都市割や城下町的町割、それに明治以後の新しい町割等三つ以上の新旧の都市計画がみられる場合が少なくない。このような例はイタリアのナポリにおいても見ることが出来る。ナポリはその文字の如くネアポリスであって、紀元前におけるギリシア人の地中海沿岸における植民都市の一つであり、ローマ時代をへて現在までも継承されてきている港湾都市である。ナポリ駅前から西方に拡がった中心部の長方形の約一〇〇エーカーの町割は五、五エーカーの区画で十六等分された。紀元前六世紀に溯る最もふるいギリシア時代のものである。

その他ヨーロッパ都市や北アの都市にして、その市街地の基盤をローマタウンに負うものは極めて多い。デキユマヌスと呼ばれる東西大路に対して、カルドスと呼ばれた南北大路が直交、その交叉点あたりに人民の広場や裁判所、市場等をかねたフォーラムがおかれていた。従ってローマタウンはいわわが国府に似た性格や形態をとどめていたということが出来る。だがただ形態上両者が異なるのは国府の場合その四周をとりまいて土塁の存在するものもあるが、せいぜいその高さは一、二メートル程度のもので、ローマタウンのそれが三メートル以上もあって城壁と名付けてもよいのとは異っていた。この点は帝都の平安京の場合も同様であった。応仁ノ乱後秀吉は御土居を構築、京都市街を囲繞せしめて、整備につとめたが、もともと延暦一三年（七九四）に平安京が設立せられた当時は、都城の南辺に低い羅城があった以外には四周に城壁は存在せず、東の鴨川、西の天神、御室両川をもって、防禦的役割を演ぜしめたものと思われる。これが同じ非アメリカ的な歴史的都市の仲間入りをしながらも、日本の都市がヨーロッパや中国の都市と形態的に異なるところである。木内信蔵はすでもあげたように世界における囲郭

都市の分布を気候帯と関連づけて研究した。すなわち、城壁を有する都市は乾燥地周辺地域を中心として分布するようである。その分布はまた古代文化の核心地域に一致している。シナ、中央アジア、インド、西アジア、地中海地域を主要分布地となし……と述べる。

日本の場合、近世城下町が形成された場合にも、二重、三重の湊が防禦的機能を果たしたのと異なる。これは旧大陸の場合、外敵の侵入が度々行われたこと、日本の場合には、それがなかったこと、日本では全体よりも天守閣こそ最後の拠点であった点が異なるように思える。こうした囲郭都市が発展する場合には、デリイとニューデリイにみるように、新しい町づくりはどうしても旧市街地と別の箇所につくるか、ローマその他のように、旧城壁を市街地にふくめたまま外方に発展するかしなければならぬ。日本では京都の御土居がこれにあたるが、彼にみるようなコンクリートや煉瓦でつくられたその名の如き土壁であつてみれば、その破かいの度が著しく、昨今保存が開発かが問題になるのは当然である。

つぎに日本の封建都市はまた市街地内部に袋小路や遠見遮断を有しているが、ヨーロッパやアジアの中世的都市にもこの種迷路をもつものが多い点では相似ている。すなわちこの点では碁盤目形直交状街路や放射状街路で近代的都市計画された新大陸のそれとは明かに異なる。ところで、ヨーロッパの場合中世都市といへば、その中心の歴史的核が寺院や広場を中心としているのに対して日本の中世都市にはこのようなものはない。のみならずヨーロッパの中世都市に類似した日本の近世ともいべき城下町で代表される日本の封建都市には天守閣をまもる城地はあつても、市民の集る広場が存しないことも一つの特色である。この点同じ歴史的都市とはいいながらも、日本の近世都市が、幕藩体制の名で呼ばれる政治的軍事的都市であり、封建的社会階層がそのまま都市計画に反映せられたのとは根本的に異っている。市民のための広場をもたない歴史的都市、これが日本の歴史的都市の再開発上のガンにもなつているのである。同様にヨーロッパ都市には日本の都市にみるような遠見遮断もみられない。

つぎに系譜的にみれば新大陸の都市ではメキシコシティが一五二一年にふるいスペインの都市を継承した以外はいずれも、新しい植民都市であるのに対して、ヨーロッパの都市にはこれを百万都市に例をあげてみても、紀元前に溯るふるいものにはロンドン、パリ、ローマ、ミラノ、等のいわゆる旧ローマタウンがある。百万以下となればさらに古いギリシアの首都のアテネが、古代の栄光をいまもなお、町の中央部のパルテノンの上にとどめていふことはいうまでもない。これに対して日本最古の現存都市はとなると、旧平安京の京都を指すが、その設立は八世紀の終末である。それ以前の平東京の殆んどは奈良市街からはずされていふ。しかし近年大阪市街の上町丘陵に難波宮が発掘された。いまこ

それを日本最初の条坊都市だとすれば、孝徳天皇の豊碕宮がつくられたのは大化元年（六四五）、つまり七世紀の中葉になる。中国は日本の条坊都市の母胎であるから、それよりも古いことになる。唐の長安、洛陽よりも以前に「周礼」の考工記には周の洛陽は九里四方の地を画して周圍に城壁をつくり、計一二の門を置いたとある。さらにこのような城郭都市を東洋で求めると、紀元前三千年の遠い殷墟やモヘンジョダロ、さらにはオリエントのいわゆる廃墟都市に結びつく^⑧であろう。この場合、日本の都市は飛鳥古京にさらに起源を求めるとしても、ユーラシアの都市の中ではその発生が年代的には最も新しいことになる。それは東アジアの東辺の島国であったがために、永い先史時代的な封鎖的環境が継続維持されたことを物語る。

四 都市生活の現実からみた場合

前節では歴史的都市ということにこだわっての日本都市の特質並びに問題点であったが、本節では産業革命や資本主義の洗礼を蒙って以後の世界共通の都市生活の間にあつての日本都市の特色と問題点を考えて結びにかえたい。

まず都市住民が問題になる。日本は人種民族構成の上からは単族国家である。従つて都市住民においても人種の対立を考へる必要がない。合衆国のデトロイトその他でみるような白人と黒人との闘争がない。ニューヨーク市街を歩いた人々は中央北部に大きな黒人街たるハーレムが横たわり、人の多い南部のダアンタウン区域では下層のユダヤ人街やチャイナタウン等が構成されていることに気付くであろう。これはひとり黒アメリカの都市だけではない。ヨーロッパにおいても、場末地区、すなわちアーバンフリンジゾーン (Urbanfringe Zone) には必ずこんな町がある。日本の場合、第三国人の居住地区があり、また都市部落があつても居住者は人種学的には同じであり、何ら地区意識による差別が都市住民の間に存しない点が特色である。しかるに欧米の都市の場合、これらの地区が白人よりも一段低い隔離地区 (Segregated Area) になつてゐる点に問題がある。このことは戦後の沖繩のコザ市にもみられる^⑨。

つぎには都市における建物、施設についてみよう。都市度の測定にはしばしば建物の立体度が問題になる。この点のランキングからすると日本の都市は世界都市のうちではるかに下位になる。これはもともと日本の場合、都市域にあつても木造建築が優先していたという伝統によつており、これをコンクリートに替へる場合、どうしても低階層のものからとなるのである。さらにすでに第二項でもふれたように、都市が立地

する地盤が細砂礫の沖積層から成り立っていて軟弱なためでもある。しかし乍ら今日の都市工学からすると高層建築は決して日本都市にあって不自然ではないという。地上の高層化とともに地下にもビルを建て、地表面でのバランスを保つことである。そうすれば既成市街地区での人口集中や過密の状況が可成り緩和されることになるだろう。

さらにすでにものべたように日本の都市には駐車場や広場、公園の存在がすくないことである。これは封建都市の残がいが未だに都市計画上解消されていないがためである。同じ歴史的都市でもローマ市街を歩けばふるい歴史をもつポポロ広場やベネチア広場、さてはボルケーゼ公園等市民のいこいの場所が存在することが知られる。ヨーロッパの場合公園はもともと貴族の邸宅であった場合が多い。ところがこれに代るものを日本の都市に求めることは出来ない。わずかに城のあった町では、旧城地を公園にする以外にはないのである。ただしなおこれだけでは子供の遊ぶ広場すら足りないといわなければならない。

つぎに日本は先進国であるといながら都市における下水道施設が極めて立ち遅れており、その普及率はヨーロッパの諸国と比較した場合、どの国よりも低い^⑤。ことに戦後市制ブームによって誕生した新市の中には下水道はもとよりのこと、上水道すら不完備のものがある。さらに都市ガスにおいても同様である。これまた現在でもそうであるが、都市のし尿を農村に還元した。日本農業の伝統が残存しているためである。

戦後の日本都市の持徴は市域面積が拡大した結果、市域必らずしも都市域とならなくなったことであるが、農村らしい農村のないアメリカの都市は依然とし市域 (City Region) すなわち都市域 (Urban Area) である。この場合どちらがよいかは別としても、日本の将来の都市づくりには、市域全体のより広い地理学的な地域の用途区分等が考えられなければならない。

都市生活の現実には以上のほか住民の**市民意識**や経済生活の対比が問題にされなければならない。日本の場合、自治体としての都市の発達は明治二十一年(一八八八)の市制実施とともにじまると考えた場合、その時期は極めて遅い。すなわち、凡市内ニ住居ヲ占ムル者ハ総テ其市民トス。凡市民タル者ハ此法律ニ従ヒ公共ノ营造物並市有財産ヲ共有スルノ権利ヲ有シ及市ノ分担ヲ分任スル義務ヲ有スルモノトス^⑥とあって、領国大名の絶対支配下にあったかつての城下町からの脱皮を示している。しかし隣組や町組的組織の伝統はよかれあしかれ今日にまでなお残存しているのに対して、市民権獲得の歴史がふるいヨーロッパ人の住民意識はあくまで個が全体に直結している。また近隣地区 (Neighborhood area) というも、必らずしも日本の隣組的なものと同じではない。これを衣食住といった経済面のみに限ってみても彼此の差が気候風土に加味

された伝統に負うていることはいうまでもない。このほか都市生活といえど都市交通が問題になる。外国の場合今日殆んどといっていいほど路面電車が廃止され、バスや地下鉄にかえられた。日本の場合六大都市は年々の赤字財政に悩まされながらも、なおこれを維持している。百万都市にあつては交通麻痺の緩和の上からはのぞましいが、大都市以外に地下鉄の発達がみられない今日徹去にふみきすることは早急にすぎる。また歴史的都市が大部分である日本都市の巾の狭い市街地に、いたずらにアメリカ式の自動車交通を盛んにすることがよいか悪いかの問題も将来の都市計画とにらみ合せて考えらるべき問題である。

戦後の一九五五年に長崎市とミネソタ州のセントポールとの提携にはじまって日本の都市と諸外国都市との友好親善を目的とした姉妹契約のようなものが結ばれて以来、今日では九〇市に及んでいる^⑩。これらの中には鹿児島とナポリ、松本とソルトレイクシティのごとく、景観、内容ともに極めて類似したものもある。この場合政治的なものにかたよらない彼此都市の健全なる発展が期待される。(一九六七年八月)

註

- ① C. A. Doxiadis. *Faistics-Science of Human Settlement*. 磯村英一訳「新しい都市の未来像」1965
- ② The Eleventh Pacific Science Congress Tokyo, 1966.
- ③ R. B. Hall: *The Cities of Japan: Notes on Distribution and Inherited Forms*. (A. A. G. 1934. No4)
- ④ R. B. Hall: *Some Rural Settlement Forms in Japan* (Geogr. Review. 1931)
- ⑤ 小川琢治「日本の都市(人文地理研究)昭和三四年所収)
- ⑥ E. Oberhummer: *Amerikanische u. europäische Städte*. 1915 一部翻譯は人文地理学報「都市地理研究」(昭和四年所収)参照
- ⑦ P. Geddes: *Cities in Evolution, An Introduction to the Town Planning Movement and to the Study of Civics*. 1915
- ⑧ J. Fluere: *Some Types of cities in Temperate Europe: The Geographical Review* Vol X. No 6. 1926
- ⑨ R. Dickinson: *West European Cities 1951* W. A. Robson: *Great Cities of the World 1954*
- ⑩ Proceedings of IGU Regional Conference in Japan 1957 この中の人文地理学の部門の中で、日本の歴史的都市や日本都市における伝統産業や近代工業の様子、その他日本都市における近代化の様子が日本の学者によって夫々英文で発表せられた。また都市文明史家のマンフォード(L. Mumford)の数々の書物、とりわけ近年出版の *The City in History its origins, its transformations and its prospects*. 1961にも日本都市に関する記述がなつのは欧米の学者になお日本都市研究の意義が知られていゝなことを意味する。
- ⑪ P. M. Hauser & L. F. Schnore: *The Study of Urbanization*. 1965。なほインゲンと題しては近年 Roy Turner: *India's Urban Future*. 1962

なる書物が出版されている。

- ⑫ 米倉二郎、東亜都市の類型（「東亜の集落」昭和三五年所収）
- ⑬ 木内信蔵、「都市地理学研究」昭和二六年。
- ⑭ Y. Masai. Urbanization of Japan : Present and Future—A world wide view. 1966
- ⑮ 統計は「理科年表」による。
- ⑯ 藤岡謙二郎、「地理学の旅」昭和三八。
- ⑰ 甲南高校、「阪神水害記念帳」昭和一三年。
「六甲山系水害対策に関する答申書」昭和四二年八月。
- ⑱ 磯村英一、「変わる地方都市」昭和三九年。
- ⑲ 建設省計画局、「都市地盤調査報告書」第一巻は「伊勢湾北部臨海地帯の地盤」昭和三七年。今日まで十巻に及ぶ。
- ⑳ G. Taylor : Urban Geography. 1949
- ㉑ 福井英一郎、都市気候からみた世界の大都市（「地理」一九六七、七）
- ㉒ C. C. Harris : A Functional Classification of Cities in the United States. (Geogr. Review)
- ㉓ M. Arousseau : Recent Contribution to Urban Geography (Geogr. Review. 1924)
- ㉔ F. Osborn & A. Whitick : The New Towns. 1963
- ㉕ W. Geisler : Die deutsche Stadt, eine Beitrag zur Morphologie der Kulturlandschaft. 1924
- ㉖ E. W. Burgess & R. E. Park : The City, 1925
- ㉗ S. A. Queen & L. F. Thomas : The City, a Study of Urbanism in the United States. 1939
- ㉘ 藤岡謙二郎、「歴史的景観の美」昭和四〇年。
- ㉙ 同 近畿の諸都市に残存する古文化財と歴史的核の現代的意義（「日本地誌ゼミナルVI 近畿地方、昭和三九年所収）
- ㉚ F. Havefield, Ancient Town Planning. 1913
- ㉛ 藤岡謙二郎、イギリスにおけるローマンタウンの歴史地理学的性格について（「都市と交通路の歴史地理学的研究」昭和四二年所収）
- ㉜ 同、都市としての平安京と交通路の問題（同右）
- ㉝ 同、先史文化の流れと都市文明の流れと（「朝倉地理学講座」七、「歴史地理学」昭和四二年所収）
- ㉞ 同、地理学における人種民族研究の諸問題（朝倉「民族地理」上、昭和四〇年所収）
- ㉟ 「都市問題講座」2—住宅、土地、水—昭和四〇年。
- ㊱ 「史料による日本の歩み」近代編、その市制（抄）第六条参照。昭和二六年。
- ㊲ 全国市長会編、「日本都市年鑑」一九六六。

世界都市に占める日本都市の特質と問題点